



国際委員会だより

【第18回】

Message from International committee

実践的海外プロジェクト⑤ ～乳児帯同の海外出張～

国際委員会

木村 綾子 | KIMURA Ayako

建設コンサルタンツ協会の「海外市場対応能力の支援」の一環として、国際委員会から海外業務を紹介する記事を継続して掲載しています。当初4回シリーズの予定でしたが、テーマや地域を変えて延伸することになり、第5回目をお届けいたします。

インタビュー対象者プロフィール

対象者：澤下理恵 (Rie SAWASHITA) (38歳)
所属：(株) オリエンタルコンサルタンツ GC事業本部
総合開発事業部 建築開発部
専門分野：建築計画、人材育成
事業ステージ：調査
経験年数：海外11年
業務実施国：中国、インドネシア、コンゴ民主共和国、アフガニスタン、ヨルダン、バングラデシュ、ミャンマー

インタビュー内容

澤下さんは大学院で建設工学を専攻し、開発コンサルタントの一員としてスタートしました。

女性エンジニアが多くなりつつある昨今ですが、育児と業務、それも海外出張を伴う世界に飛び込もうとする女性と、それを支える上司や同僚の皆様の今後のご参考になればと思い、お話を伺いました。

Q1. 澤下さんは昨年5月に生まれた男のお子さんを連れて、その年の9月(生後4カ月)と今年の1月(生後8カ月)にそれぞれ1か月余りヨルダンへ出張をされましたが、帯同を決心した一番の理由は何ですか。

- A1. 母として一緒にいたいという気持ちが一番の理由です。また、子供が小さい時に一緒に海外出張に赴く人は少数派かも知れませんが、だから出来ないというわけではない、と思いました。そして、子供が異文化に触れることは良い経験だと家族が促してくれたことも決心した要因です。もちろん気持ちだけでできるわけではありません。出産前に何度か現地に出張の機会があり、病院とそこで受けられる医療内容、保育園等の生活環境について調べることができたことも一因です。
- Q2. お子さんを帯同することについて話したときの上司の反応はどうでしたか。また、クライアント等にお伝えしましたか。



写真1 子供の誕生祝に植物とお金を贈る習慣があるヨルダンのタフィラ地方で、プレゼントを受け取る澤下親子



写真2 入園した現地保育園

- A2. 上司は賛成してくれました。体調を優先し、遅刻や休暇等の連絡は事後になっても構わないとの許可をいただいたことは、精神的に楽になりました。また、この業務はJICA案件でしたので、チームメンバーに加え、事前に東京と現地のJICA事務所に伝えました。
- Q3. 今回の出張は「人材育成・社会インフラ改善事業支援」でした。生後数ヶ月のお子さんを帯同して、現地業務中はどうされましたか。
- A3. 現地の保育園に入園させましたが、激しく泣いたので、主にベビー・シッターさんに預かって頂きました。
- Q4. 渡航中や現地での仕事でお子さんに関して準備したこと、努力したこと、苦労したことなどについて教えてください。
- A4. 荷物は予め空港に送り、当日は抱っこして空港入りし、空港のベビーカーを利用しました。移動中は荷物が多く、一人では物理的に困難な場面がありましたが、その際は声を出して周りの人に協力をお願いしました。

2回目の帯同時は離乳食期でしたので、日本から離乳食を持参しましたが、「郷に入れば郷に従え」と、現地のパン、果物、野菜などで離乳食を作りました。スプーンやナイフで切ったり、潰したりして作った自家製の離乳食です。野菜も熱湯で湯通しして使いました。結局日本から持参した離乳食は一度も使いませんでした。

また、息子が指しゃぶりをしているのを見て「ノー・グッド」と何度か指摘された際は、現地のやり方に倣い、早々に「おしゃぶり」を購入して使用し

ました。日本に加え、ヨルダンの育児方法にも触れることができたことは有り難く思いました。

また、業務で確実に成果をあげることが、子供と接する私の精神面にも良い影響を与えると考え、活動時間の長短に関わらず、確実に成果をあげるよう努めています。これは出張中に限らず、出産後、仕事を続ける上で常に意識しています。

- Q5. 仕事と育児の両立に必要なものは何だと思えますか。
- A5. 本人のビジョンと意思だと思います。自分は職業人としてどうなりたいのか、子供にどう育てたいか、その為になどどのような母になるのが望ましいかなどを具体的にイメージし、成し遂げたいことに優先順位をつけました。

また、一般的に仕事と育児の両立において、その大変さに焦点が当てられがちですが、私はあまり悲観的には感じていません。その理由は、環境を楽しんでいるからです。子供を出産したことで、時間的に制限が生じますが、それにより仕事の効率化を覚えました。また、子供は予測不可能な事態を招き、予定通りに進まないことが多いですが、この対処方法は、仕事にも充分応用できると感じました。

私は、1年の育児休暇を取得して、子供と二人でいるより、さまざまな人々と触れ合う環境の方が我が子の成長に良いと思いい、産休後はすぐ復職して、保育園や地域のグループ保育を活用しながら子育てをすることにしました。あまり前例をみつけられず、今も手探りですが、仕事も子育ても楽しく、子供と笑顔で向き合える日々は大変充実しています。

まとめ

開発コンサルタント業界における海外出張は、多くが途上国であるため、小さなお子さんの帯同は必ずしも実現できるとは限りません。業務内容、職場と生活の環境によっても事情は異なるでしょう。しかし、核家族の母親が仕事を続けていくためには、帯同を視野に入れざるを得ないケースが増えてくると思います。実現するための課題は多いですが、本人と企業双方の協力の上、実現のきっかけになりましたら幸いです。